平成２年３月　第12号
海蔵社協通算　第33号

地区広報 かいぞう



特集！ よみがえった弥生時代

西阿倉川 上野遺跡

上野遺跡は、埋蔵文化財分布調査を宅地開発業者からの依頼を受けて行ったところ、遺物の散布が確認され、さらに試掘調査を行ったところ弥生時代から室町時代にかけての遺構・遺物が検出されたため、弥生時代から室町時代にかけての遺跡であることがわかりました。

この場所は、宅地開発を行う計画がされていたため、開発により遺跡が破壊されてしまう前に、遺跡の内容を記録し、四日市市の歴史を解明する資料とすることを目的として、発掘調査が行われました。

今回の調査では、弥生時代から室町時代にいたる遺構・遺物を検出しましたが、各時代の遺構が複雑に重なり合っているところや、大きく削り取られたところがあり、ひとつひとつの遺構がはっきりとわかるものはあまり多くありませんでした。



弥生時代の壺

海蔵地区の人口　総数 10,685　男 5,301　女 5,384　世帯数 3,438(２月末現在)

編　集・発　行　　海蔵地区社会福祉協議会・海蔵地区市民センター

〔検出した主な遺構〕

竪穴住居跡

弥生時代中期（1900年前）～古墳時代前期（1600年前）、奈良時代（1200年前）のものを検出しました。

昔の人々が暮らしていた家は、円形または方形に地面を数十㎝掘り下げてたいらにし、そこを床として使用し、屋根を付けたもので、竪穴住居といいます。床の中央には地面が赤く焼けたところがあり、炉として使用していたことがわかります。炉跡が隅に寄っているものもあります。炉は時代が新しくなるにしたがって、壁の近くに作られるようになり、古墳時代の中頃（1400年前）には、住居の北側の壁にかまどを作るようになります。また床面には、屋根を支える柱を立てたと思われる穴が、4ヶ所確認できます。他に住居の床をふちどるように浅く幅が狭い溝を掘っているものも中にはあります。

上野遺跡では、38棟の竪穴住居跡が検出され、ほとんどが方形の住居跡ですが、2棟だけ円形の住居跡が見つかっています。円形の住居跡は、どちらも弥生時代中期のものです。方形の住居跡は、弥生時代中期からありますが、円形のものの方が古いことが、調査の結果わかりました。

溝跡

調査区がなだらかに傾斜し、平坦になったところに幅80㎝～140㎝程の溝が北東から南西に向かってつけられています。調査区の外にも溝は延びており全体の長さはわかりませんが、調査した部分の長さは約23㎝あります。溝の中から多数の弥生時代中期（1900年前）の土器が出土しています。弥生時代の住居跡は、この溝よりも北側の丘陵上からしか検出されませんでしたので、弥生時代の集落の範囲を限るための溝とも考えられます。

中世（400年前）の頃の溝は、たくさん見つかっていますが、排水のためだけでなく、土地を区分けするために掘られた溝もあるようです。

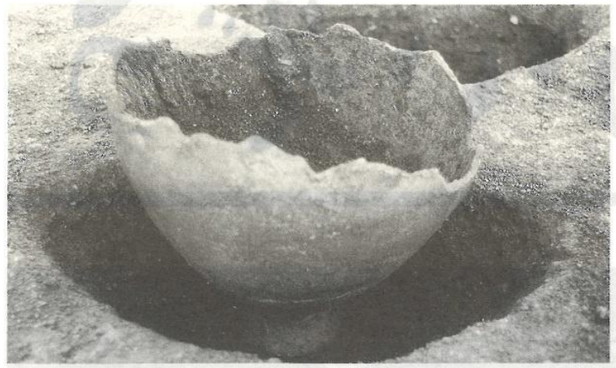
井戸

円形で、素掘りの井戸を2基検出しました。一つは、直径約250㎝、深さ150～180㎝のもので、中から平安時代の土器とともに瓦や木製品が出土しています。土器の中には底に墨で文字を書いたものがあり、この文字が判読できれば遺跡の内容を解明するための貴重な資料となります。もう一つの井戸は、直径約280㎝、深さ150～180㎝で、中から土器とともに櫛や曲物といわれる木製品が出土しています。

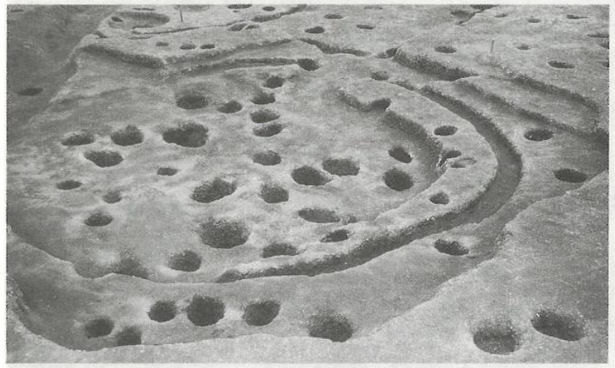
弥生時代から奈良時代にかけては、川や水が湧き出てくる所へ水を汲みに行っていたようですが、平安時代からは、住居の近くに井戸を掘って水を汲んでいたようです。

掘立柱建物跡

建物の柱穴と思われる円形の小さな穴を多数検出しましたが、現在のところどのような規模の建物であったのかはっきりしていません。また、ほとんどは、平安時代から室町時代頃のものと思われますが、出土した遺物を整理していけば、弥生時代や古墳時代の倉庫のような建物跡も確認できるかもしれません。



住居跡の中に穴を掘って埋められていた弥生時代土器（カメ）



重なり合う弥生時代の住居跡（同じ場所に何度も住居を作っています）



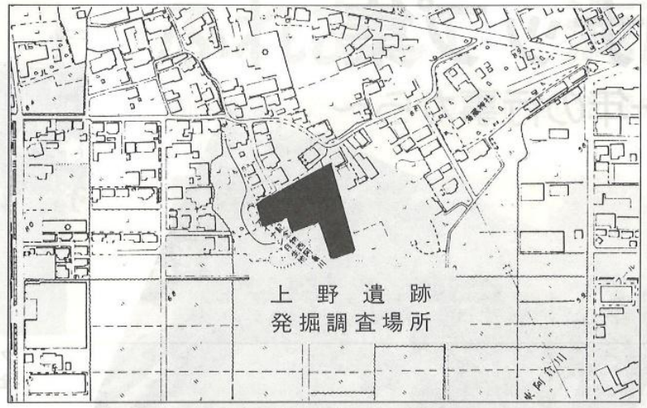
掘立柱建建物跡（たくさんの穴は、柱を埋めた穴と思われます）



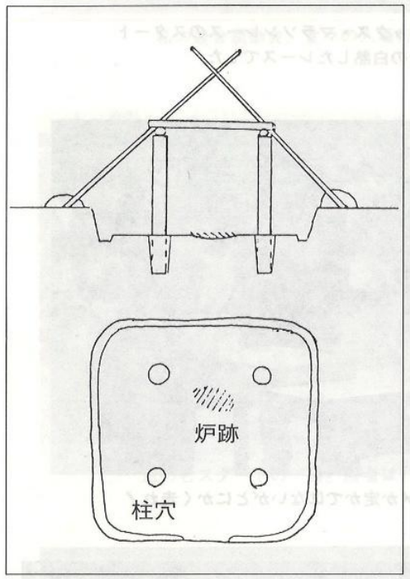
室町時代の井戸跡

埋蔵文化財は、私たちの身近にあり、郷土の歴史を明らかにしてくれる貴重な文化遺産です。

しかし、この埋蔵文化財が失われてしまったなら、私たちの郷土の歴史もわからないままになってしまいます。そこで私たちは、この貴重な文化の遺産である埋蔵文化財を身近なものとして学び、大切に保存し、未来に伝えていかなければなりません。



上野遺跡発掘調査場所位置図



竪穴住居跡模式図



弥生時代の住居跡から出土した土器（上）、土器を取り除いた状態（下）

〔まとめ〕

上野遺跡は、弥生時代中期（約1900年前）から奈良時代（約1200年前）にかけては、たくさんの竪穴住居跡が見つかったことから、一般の集落（ムラ）が営まれていた場所であると考えられます。中でも弥生時代中期に最も多くの住居があったようです。この頃の上野遺跡は、南向きの日あたりの良い場所に住居を建て、その前面に広がる低地に田を作り、背後に広がる森で狩りをし、木の実などを採集して食料を得ていたと思われます。また、時には川や海へ出て、魚などをとっていたと思われます。

このような状況の弥生時代の遺跡は、四日市市内では永井遺跡・大谷遺跡・山奥遺跡など他にもいくつか発掘調査が行われていますが、弥生時代中期の集落跡が確認されたのは上野遺跡が初めてであり、貴重なものといえます。

こうした生活は、古墳時代の初め頃まで続いていたようですが、古墳時代の中頃になると集落はなくなっています。その後、古墳時代の終わり頃と奈良時代に住居が建てられていたようです。

このあと平安時代の終わり頃から室町時代にかけては、井戸が作られており、また建物の柱を埋めた穴と思われるものが多数検出されていますので、掘立柱建物もたくさん建てられていたようです。井戸からは瓦が出土しましたが、この当時、瓦は一般の家の屋根には使っていませんでしたので、お寺のような特殊な建物が建てられていたのかも知れません。しかし、まだ出土した遺物の整理も進んでいませんので、建物跡の状況などははっきりしていません。今後、記録した図面や出土遺物の整理が進めば、より一層上野遺跡の内容が明らかになり、昔の人々の暮らしのようすを、知ることができるようになるでしょう。

（発掘調査　教育委員会文化課）